

日光輪王寺蔵『諸事表白』所収説話の方法（上）： 漢文翻訳の表現とその意図をめぐって

著者	山本 真吾
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	8
ページ	13-24
発行年	1997-06-29
URL	http://hdl.handle.net/10076/6515

日光輪王寺藏『諸事表白』所収説話の方法（上）

— 漢文翻訳の表現とその意図をめぐって —

山本 直真 五〇

○キーワード— 諸事表白、法会、説話、漢文翻訳、岸禪師、和文語、漢文訓読語

一、はじめに

日光山の古刹、輪王寺の慈眼堂経藏、所謂天海藏に伝来の『諸事表白』一帖は、天台宗僧の編に係り、鎌倉時代初期に成立したと見られる^(注1)。片仮名文の文献である。

本書の国語史料としての価値は、打聞集、法華百座聞書抄、中山法華経寺藏三教指帰注、金沢文庫本仏教説話集に比肩するものと判ぜられ、語彙・語法の観察においては本自漢字や仮名に差された声点なども有益な研究材料を提供する文献であると認められる^(注2)。

右の打聞集をはじめとする片仮名文の文章は、説話を含んでいる点で共通しており、文学研究の上では、説話文学作品の範疇に入る文献群でもある。そこで、従来、国語史研究においても、『説話の言語』を観察し、院政期説話文学の頂点に立つ今昔物語集の語彙・文体との、直接乃至間接の連絡を認める方向

などに考察の重点が置かれてきたように思う。

本書も、また、法会における説教の記録の中に例話として引かれた説話を都合二十篇収めている。この二十篇は、叙述の多寡・精粗の点で有り様が区々であり、登場人物の動きを克明に描写し、会話・心内文を巧みに織り混ぜて詳述するものもあれば、要旨のみを示す程度の極めて簡略なものまで存する。

筆者は、旧稿において、各説話毎に、内容上関連する記事を示しておいたが、これも、全体の叙述の展開、細部の字句に至るまで相当に一致するものから、説話の一部分に同趣のことが見えるといった程度のものでさまざまであって、出典探索も完璧というには程遠いのが現状である。そこで、ひとまず、この『諸事表白』所収説話の内、登場人物の動きを克明に描き、会話・心内文を交えて話として具体的な展開の認められる主要説話について、特に、本邦文献に比較可能な叙述内容を有する類話を見出したものを対象として、プロットの進行等の比較を行い、法会の主張との関わりから考察してみたのである^(注3)。

本稿では、これを承け、さらに、主要説話の中で、仏教関係の中国漢文との比較の成り立つ説話二篇に注目し、まずは、プロットの区分を行なった後、共通の内容と相違するものとを整

理し、この作業を通して、漢文を読み解いて翻訳し、時に表現を改変し、言葉を紡いでゆく語り手の表現特性を押さえることを目指したい。さらに、当該法会の説教においてその説話がどのような役割を果たしているかを念頭に置きながら、語り手の改変の意図が如何辺に存したかも解明したいと思う。

二、唐岸禪師往生説話について

(1) 説話の梗概

本書第二篇「施主分大般若 正治二年三月廿五日 去年逝去貴女也」(五七七頁下1行め、『統天台宗全書 法儀1』所収本文の所在。以下同) (注)には、二つの説話を引載する。このうち小野篁説話については、旧稿でやや詳しく考察した。ここでは残る一篇、唐の岸禪師に纏わる説話を取り上げてみたい。この説話の梗概をプロットの進行に沿って三つに区分して示すと次のようである。

- 1、唐の併州に岸禪師という人がおり、往生の行業熟し、かつ観音・勢至菩薩が空中に顕れたので、岸、往生の時が来たと悟る。そこで、諸弟子に随伴の者を募ったところ、一人として名乗り出る者はいなかった。(五七八下5〜11)
- 2、中に十二、三歳ほどの小児が御供を申し出たが、師匠の岸は、父母の許可を得るよう命じたところ、小児、父母のもとに行つてその志を打ち明ける。父母はこれを聞いて、

分別のない幼心から出た戯れの言と解し、快諾する。小児は飲んで、行水し晴れの衣装を身に纏い、師の持佛堂に走り入り、念仏して、「先に参ります」と言う。師の岸は、「私より先ではあまりに慌たらしい。二人一緒に」とたしなめる。しかし、小児はこれを却け念仏して、先に息をひきとつた。(五七八下13〜五七九上5)

- 3、師匠は直ちに筆を執つて、観音勢至の二菩薩を贊嘆する言詩四韻を著し終えると、諸弟子に自分の念仏を助けるよう告げ、端座命終した。齡八十であった。(五七九上8〜13)

(2) 類話との比較

本説話の類話としては、中国仏書の『宋高僧傳』卷第十八(大正藏五十・史伝部二所収)・『唐岸禪師傳』、『往生西方淨土瑞應傳』(同五十一・史伝部三所収)・『岸禪師第十四』、『淨土往生傳』卷中(同上)・『唐并州釋惟岸仲隨』、『往生集』卷第一(同上)・『惟岸』の四つを見出ししている。このうち、言語量が多く最も詳しい内容を具有するのは『淨土往生傳』巻中であるが、『諸事表白』所収の当該説話と叙述内容において最も一致度の高いのは、宋の太平興国七年(九八二)に贊寧が勅によって撰じた『宋高僧傳』卷第十八の『唐岸禪師傳』であると認められる。『往生集』巻第一もこれと同趣であるが、四句の詩の前二句を略したり、末尾に「贊曰」として「岸之事

無惑矣。彼童子非久積淨業。胡脫化之神異。爾不見十念成功乎。不然則宿世善根熟耳。修淨業者。或今身不克往生。觀此可以自慰」の言辭を添える等の点でやや距離がある。また、『往生西方淨土瑞應傳』は他に比して著しく簡略であり、かつプロット3の詩文の引用がないなど、やはり『諸事表白』所収の当該説話とは徑庭が存する。

したがって、『宋高僧傳』の説話が本説話の直接の依拠資料と見做し得るかはともかくとして、まずは、これを比較文献の中心に据え、適宜他の三文獻も参看することとする。

因みに、源空撰『諸宗經疏目錄』に拠れば、「俱舍論疏十五卷法實」に「宋高僧傳法實傳云」とあり、『諸事表白』の成立した鎌倉時代初期に、『宋高僧傳』の本邦に伝来していたことが知られる。

以下には、「I」『宋高僧傳』・「唐岸禪師傳」と本説話が叙述内容の上で一致する箇所と、「II」両者が異なる箇所とに二分し、さらに、「II」については、(a)『宋高僧傳』・「唐岸禪師傳」に存し、『諸事表白』に認められない箇所と、(b)『宋高僧傳』・「唐岸禪師傳」に無く、『諸事表白』にのみ認められる箇所とに分けて、それぞれ、(1)で分けたプロット毎に、叙述内容と表現の両面から、比較検討を行なうこととする。

「I」両者に共通する箇所

「プロット1」

①釋岸禪師。并州人也。(中略) 見觀音勢至菩薩現於空

中持レ久不レ滅。(中略)岸知西方緣熟。告諸弟子云。吾今往生。誰可レ偕行。(『宋高僧傳』・「唐岸禪師傳」)
↓唐併州ニ岸ニ禪師ト申ス人有キ。往生ノ行業已ニ熟シテ、且觀音勢至、空中ニ顯レ給シカハ、「我レ已ニ往生シテウス」ト知テ告テ諸弟子テ云ク「我レ今欲ス往生セムト誰カ具シテ可キ」ト參ル云。(『諸事表白』第二篇、以下この順に示す。)

「プロット2」

②有ニ小童子ニ稽顙白。願隨レ師去。

↓其ニ幼ニ少ナル小兒ノ十三許リ候ケルカ、「我レ御共ニ參リ候ハム」ト云ハリ。

③乃令ニ往辭ニ父母ニ。父母謂爲ニ戲言ニ。而令ニ沐浴ニ著ニ淨衣ニ入ニ道場ニ念レ佛。

↓師ノ言ウ様ハ、「父母ニ申シ合セテ御セ」ト云ニ、少兒、父母ノ言キニ往イテ、「御房ノ極樂ハ參リ給ニ御共ニ參ラウト思也」ト云ニ、父母、聞テ此事ヲ、「幼ケ無キ何ニト事ヲ云フナンメリ」ト思テ「トウマイレカシ」ト云。少兒、悦テ行水ナムト打シテ新シウ清ヨキハレノ衣裳ヲニナント覺キ衣物ヲ

取り著テ行師ノ持佛堂ニ走り入テ念佛シテ申ス様ハ、
④須臾而終。岸責曰。何得ニ前行ニ。

↓「サラハ我ハ先キ立テ參リ候ハム」ト云ニ、師ノ云フ様ハ、

「イカニ我ヨリ先テハアワタ、シウ參ムトハ云フリ。一度ニ
コソ」ト云。(中略)如法ニ念佛シテ乍ラ居一如シテ眠フル
カ氣モ絶候キ。

〔プロット3〕

⑤時岸素筆讀ニ菩薩曰。觀音助遠接。勢至輔遙迎。寶瓶冠
上顯。化佛頂前明。俱遊十方利。持華候九生。願以
慈悲手。提獎共西行。

↓サテ、ソノ師匠ハニワカニ硯ヲ乞筆ヲ取テ作テ言シテ詩ト
ヲ四韻ヲ顯ハシ給タル觀音勢至ノ二菩薩ヲ讀メタテマツテ云
ク、「觀音ハ助テ遠ク接シ、勢至ハ輔遙ニ迎ハ、寶瓶冠ノ上
ニ顯ハシ、化佛頂ノ前ニ明ナリ。俱ニ遊テ十方利ニ。持テ花
ヲ惟キス九生ニ。願ハ以テ慈悲ノ手ニ。提テ獎キ共
ニ西ニ行ク」ト。

⑥述レ讀已別諸弟子ニ入道場。命門徒助吾念佛。端坐而
終。春秋八十。

↓書キ了テ閣サシテ筆ヲ合掌ヲ、向テ西ニ告ク、「汝等、念佛シテ
助ヨ」ト我カ念佛ヲ云テ、端坐シテ命終シキ。年八十。
用語の詳細な比較は後に行なうことにして、今①⑥それぞれ
の叙述内容について表現に即して比較してみることにする。
まず、①は、「西方縁熟」を知る下りを、「我レ已ニ往生シ

テウス」の心内文として表現している点が、『諸事表白』の説
話に特徴的ではないかと見られる。また③「幼ケ無キ何ニト事
ヲ云フナンメリ」の表現も同様で、父母の心中を引用のトで承
ける表現を採っているのである。

さらに③については、「乃令ニ往辭ニ父母」。父母謂爲ニ戲言
の箇所を、「師ノ言リ様ハ」や「小兒ト云ニ」の如く會話
文として表現しており、④についてもこれと同様に、「須臾而
終」を「サラハ我ハ先キ立テ參リ候ハム」と小兒の會話表現と
して翻訳し、⑥の「命門徒助吾念佛」。も、「告ク」以下
に會話文の表現として弟子に呼び掛けるように改変されている
のである。

このように、『諸事表白』の説話では、登場人物の心中を仔
細に描き、會話文によつて叙述の展開がなされているという特
徴を第一に指摘することができよう。

次いで、注意したい表現としては、②の「小童子」を、『諸
事表白』の説話では「幼少ナル小兒ノ十二三許リ候ケルカ」と
年令の記載を附加している点がある。また、③では、単に「淨
衣」とあるのを、「新シウ清ヨキハレノ衣裳ナント覺衣物ヲホキキ」
と詳しく描かれており、共に修飾語を追加して、人物・事物の
輪郭を明確にし、聞き手がリアティーを獲得できるように配慮
されている表現と解することができる。同じく、③の「道場」
を、「師ノ持佛堂」としたり、④「須臾而終」を、「乍ラ居

如シテ眠フルカ氣モ絶候キ」と表現している箇所や、⑤「時岸素筆」の下りを、「サテ、ソノ師匠ハニワカニ硯ヲ乞筆ヲ取テ」と記す辺りも同様に、『諸事表白』の說話において描写の筆が細部に及んでいることの証左たり得ると思うものである。

〔II〕両者の相違する箇所

(a) 『宋高僧傳』・『唐岸禪師傳』に存し、『諸事表白』に認められない箇所

これには、次のものがある。

⑦約淨土爲眞歸之地。行三方等儀服動無缺。微有疾作禪觀不虧。

⑧岸召境内畫人無能畫者。忽有二人云。從西京來欲往五臺。自樂輸工畫菩薩形相。積事畢贈鞋二襪。忽隱無蹤。

⑨時垂拱元年正月七日也。

右の⑦は、先の①の最初の（中略）とした箇所であるが、服勤欠けることのない岸禪師の仏道に向う姿勢を述べるもので、⑧は、同じく①の次の（中略）の部分に存するエピソードである。これは、空中に現われた観音・勢至菩薩を二人の画人が描き消えてゆくというものである。⑨は、最末尾に添えられている。

右のいずれも、叙述の粗密の違いこそあれ、ひとり『宋高僧

傳』・『唐岸禪師傳』のみに見える記事ではなく、『往生西方淨土瑞應傳』・『岸禪師第十四』、『淨土往生傳』卷中・『唐并州釋惟岸孫髓』、『往生集』卷第一・『惟岸』にも見出し得るものである。したがって、おそらく『諸事表白』の說話において削除された蓋然性の高いものと判断される。

なぜ、この⑦⑧について『諸事表白』では削除されたかについて、說話部分のみに注目していたのでは解けないように思うので、ここではその事実の指摘に止め、後に詳しく、本說話を含む法会の主張との関わりの中で見てゆきたい。

(b) 『宋高僧傳』・『唐岸禪師傳』に無く、『諸事表白』のみに認められる箇所

(a)とは逆に『諸事表白』の說話にのみ認められる箇所は次のようである。

⑩往生ノ道ハ師匠ノ具テ参ラウトノ給ハウニモヨルマシ。人ニ被レテ具セ可キ参ル事ニアラス。只依テ自行ノ力ニゴソ往生スル事テアレトモ、現在ノ師匠ノ命ニテ往生スル也。具シテ参ラムト思フ者ヤアルトノ給ハムニ不ラム叶ハマテモ、争カ我参リ候ハムト云者ノナカラム。一人トシテ我レ参リ候ハムト申ス者ノ無カリキ。哀ニ悲シキ事ト覺ヘ候。

⑪小兒答ル様ハ「少前後ハ昔シモ候リカシ。我ハ先ニ参リ候ハム」ト云テ

⑫此カ哀ニ貴ク覺ヘ候リ。機縁ノ熟シ時キ至ヌルハ少^{コトナク}

不依ラ老タルニモ不依一事ヲト、ノハ世間ヲシタ、メテト云
ハ志ノ淺キ時ノ事テコソハ候ヘ。

⑬是コソノトカニ往生スル人テ候ヘ。

右の⑩は、プロット1の終わり、①の直後に続くものであり、
⑪は、プロット2④の（中略）の箇所、⑫は、プロット2の終
わり、④の直後に続くものである。⑬は、プロット3の末尾⑥
に後置されるものである。

このうち、⑪は、「I」の③、④、⑥と同様、会話文によつ
て登場人物（この場合は「小兒」）の思いを語らせているもの
である。⑩と⑫、⑬は、語り手（法会の説教師）の評語と認め
られるものであつて、このように説話の縮括りのみならず途中
においても、語り手の主張が顔を覗かせている展開になつてい
る点に注意される。

以上、中国仏書の類話との比較を通して、『諸事表白』説話
の叙述の展開、表現の特徴と思われる点を二、三指摘してみた
次第である。

(3) 表現上の特徴

ここでは、(2)の作業を承け、これをさらに細部に互り検討す
ることで、『諸事表白』の説話部分がいかなる言語的特徴を有
しているかについて、本説話を材料に考えてみたい。

かつて筆者は、旧稿において、表白付説教書として、山口光
円氏蔵『草案集』及び醍醐寺蔵『薬師』、金沢文庫本『仏説説
話集』を取り上げ、これらを表白部、正釈部に分け、さらに正
釈部を、説教部と説話部に二分して、各部の言語的特徴を相互
比較によつて明らかにしたことがある^(註5)。

本文献『諸事表白』も、前稿で指摘したように^(註5)、雑纂の
形態ながら、表白部と正釈部、さらに施主分部を有しており、
さらに、正釈部と施主分部は、説教部と説話部に分けることが
可能であり、これらと同じく表白付説教書の一群に属せしめる
ことが妥当であると思われる。

旧稿において、筆者が、説話部の特徴と認めたのは、次の諸
点である。

① 文字・表記 || 漢字本位小書き片仮名交りに、ままだ書片仮
名を交える

② 音声 || 音便形多用

③ 語法 || 過去の助動詞の多用、「ゾ」「コソ」の係結び

④ 語彙 || 訓読語を基調としつつも、和文語を混用

⑤ 敬語 || 種類多い

ここでは、まず、右の言語的特徴が『諸事表白』の当該説話
においても認められるかどうかを確認し、さらに漢文翻訳とい
つた観点から気付いた点について言及してみたい。

① 文字・表記

本説話も、原則的には漢字本位で小書きの片仮名を交え用い

る表記体である。

○唐併^ト州^ニ岸^ニ禪師ト申ス人有キ。往生ノ行業已ニ熟シテ、且觀音勢至、空中ニ顯レ給シカハ、「我レ已ニ往生シテウス」ト知テ告テ諸弟子テ云ク「我レ今欲ヌ往生セムト誰カ具シテ可キ」ト參ル云。

しかしながら、大書の片仮名も散見するのであって、「ハレノ衣裳」、「サラハ」、「イカニ」、「アワタ、シウ」、「ソノ」、「ニワカニ」等の自立語から、「ヨルマシ」、「云ウナシメリ」、「讚メタテマツテ」の如き附屬語、そして「トウマイレカシ」といった文単位をすべて本行に大字で片仮名書きする例まで存する。

② 音声

まず、動詞については、イ音便の例が見出せる。

○少兒、父ノ許^ニ往イテ、

○取り著^テ行師ノ持佛堂ニ走リ入テ念佛シテ申ス様ハ、

○^{サシテ}閣^筆

右のケースでの非音便形は、本説話からは指摘されない。また、促音便と解される例としては、

○讚メタテマツテ云ク、

○持^テ花^ヲ惟^スス九生^ニ。

がある。

形容詞の連用形は、通例ウ音便をとるようであり、

○イカニ我ヨリ先テハアワタ、シウ參ムトハ云フリ。他に、「トウ（と）（疾）し」の連用形」、「新シウ」がある。但し、

○此カ哀ニ貴ク覺ハ候リ。

○觀音ハ助テ遠ク接シ、

の二例は非音便形であり、後者は言詩の引用中の例である。一方、連体形は、「悲シキ」、「幼ケ無キ（いとけなし）の連体形」、「清ヨキ」、「淺キ」の如くほとんどが非音便形であつて、イ音便は、

○少^{ヲサナニモ}不^レ依^ラ、

の一例のみである。

③ 語法

本説話では、過去の助動詞「キ」を専ら用いるようである。

○唐併^ト州^ニ岸^ニ禪師ト申ス人有キ。往生ノ行業已ニ熟シテ、且觀音勢至、空中ニ顯レ給シカハ、

○如法ニ念佛シテ乍ラ居一^ニ如シテ眠^ルカ氣^ヲ絶^テ候^キ。

○一人トシテ「我レ參リ候ハム」ト申ス者ノ無カリキ。

但し、一例、「ケリ」を用いる箇所がある。

○其ニ幼^キ少ナル小兒ノ十二三許リ候ケルカ、

また、強意の係結びの例としては、

○志ノ淺キ時ノ事テコソハ候ハ。

○是コソノトカニ往生スル人テ候ハ。

○「イカニ我ヨリ先テハアワタ、シウ參ムトハ云フリ。一度ニ
コソ」ト云。

のように「コソ」による例が見える。

④ 語彙

本説話の使用語彙としては、いわゆる漢文訓読語と和文語
とが、混在していると認められる。

まず、訓読語としては、次のようなものがある。

「せむと欲す」

○告テ諸弟子テ云ク「我レ今欲ス往生セムト。誰カ 具シテ可キ
ト參ル云。

「ねぶる（眠）」

○如法ニ念佛シテ乍ラ居一如シテ眠フルカ氣モ絶候キ。

「すこしき（少）」

○小兒答ル様ハ「少ノ前後ハ昔シモ候リカシ。我ハ先ニ參リ候
ハム」ト云テ、

「すでに（已）」

○唐併^{（一）}州^{（二）}ニ岸^{（三）}禪師ト申ス人有キ。往生ノ行業已ニ熟
シテ且觀音勢至、空中ニ顯レ給シカハ、「我レ已ニ往生シテ
ウス」ト知テ、

「いはく（曰）」

○觀音勢至ノ二菩薩ヲ讚メタテマツテ云ク

「ねがはくは（願）」

○願ハ以テ慈悲ノ手ニ。提^{（一）}獎^{（二）}共ニ西ニ行ク」ト。

右のうち、「いはく」「ねがはくは」の語は、『宋高僧傳』
の対応箇所にも「云」・「願」の字として見えるものである。

一方に、訓点資料には通常認めがたく、仮名文学作品などに
見える和文語と考えられるものとしては、次のような語を指摘
できる。

「あわただし」

○「イカニ我ヨリ先テハアワタ、シウ參ムトハ云フリ。一度ニ
コソ」ト云。

「いとけなし（稚）」

○父母、聞テ此事ヲ、「幼ケ無キ何ニト事ヲ云フナンメリ」ト
思テ、

「とし（疾）」

○「トウマイレカシ」ト云。

「のどかなり」

○是コソノトカニ往生スル人テ候ハ。

○「したたむ」

○事ヲトノヘ世間ヲシタ、メテト云ハ志ノ淺キ時ノ事テコソ
ハ候ハ。

「さらば」

○「サラハ我ハ先キ立テ參リ候ハム」ト云ニ、

「さて」

○サテ、ソノ師匠ハニワカニ硯ヲ乞筆ヲ取テ、

「なんめり」

○父母、聞テ此事ヲ、「幼ケ無キ何ニト事ヲ云フナンメリ」ト思テ、

「いとけなし」の漢字表記と思われる例を除き、片仮名書の例ばかりである。また、「さて」のように地の文に見えるものも存するが、他はいずれも会話文や評語の箇所に集中している点が注意される。

右以外に、特に、注目されるのが、会話の引用形式であり、

○師ノ言リ様ハ、「父母ニ申シ合セテ御セ」ト云ニ、少兒、父母ノ許ニ往イテ、「御房ノ極樂ハ參リ給ニ御共ニ參ラウト思也」ト云ニ、父母、聞テ此事ヲ、「幼ケ無キ何ニト事ヲ云フナンメリ」ト思テ「トウマイレカシ」ト云。少兒、悦テ行水

ナムト打シテ新シウ清ヨキハレノ衣裳（ヲホシキ）衣物ヲ

取り著テ行師ノ持佛堂ニ走り入テ念佛シテ申ヌ様ハ、

の傍線部のように、先掲の『宋高僧傳』に対応箇所の認められる二例の「いはく」形式の他は、「様（やう）」によつて導く形式である。

これは、かつて遠藤好英氏によつて、打聞集、法華百座聞書抄、そして今昔物語集などに多用されることが明らかにされ、「片かな交じり文に關係の深い形式」で、「口頭語的性格を持

つのではないか」と説かれた形式である。

また、漢語で注意されるものとしては、

「具（グ）す」

○告テ諸弟子テ云ク「我レ今欲ス往生セムト誰カ具シテ可キ」ト參ル云。

「如法（ニヨホフ）に」

○如法ニ念佛シテ乍ラ居一如シテ眠フルカ氣モ絶候キ。

がある。前者は『宋高僧傳』の対応箇所において「偕行」と作るころを「具す」で表現しているのであるが、この「具す」は、平安和文にもよく用いられる漢語サ変動詞である。また、「如法に」も平安歴史物語の『大鏡』（二・頼忠）などに見える語である。

このように、本説話の語彙は、漢文訓読調を示すものばかりではなく、むしろ、会話文や評語を中心に和文調に傾くものも相当に認められるのであつて、口語的な表現に和らげているふしが窺われ、漢語の使用も、引用詩文を除いて平易なものに改められている状況が看取されるのである。

⑤敬語

本説話においても、他の表白付説教書の傾向と同様に、多様な敬語が用いられている。

「たまふ（給）」

○観音勢至、空中ニ顯レ給シカハ、

「おはす(御)」

○師ノ言リ様ハ、「父母ニ申シ合セテ御セ」ト云ニ、

「たてまつる(奉)」

○観音勢至ノ二菩薩ヲ讀メタテマツテ云ク、

「まうす(申)」

○師ノ持佛堂ニ走り入テ念佛シテ申ス様ハ、

「まゐる(参)」

○「御房ノ極樂ハ参リ給ニ御共ニ参ラウト思世」ト云ニ、

但し、注意されるのが、丁寧語「さぶらふ」であつて、

○唐併州唐併州ニ岸唐併州禪師ト申ス人有キ。

○其二幼少ナル小兒ノ十三許リ候ケルカ、

の如く、いわゆる常体・敬体のゆれが認められるのである。

本説話は、導師の評が説話の途中にも顔を覗かせる語り口であつて、このゆれは、聴衆へのストレートな敬語である「候」体が、評を交えているうちに、説話部分にも及んだものと解されよう。

ここでは、鎌倉時代の表白付説教書における、説話部の言語的特徴が、『諸事表白』の本説話にもほぼ当て嵌まることを確認し、加えて、本説話においては相当に口語的な表現に改められていて、漢文の翻訳というよりは、むしろ翻案改題とでも称すに相応しい表現になっていることを見てきた。

『諸事表白』の説話の《語り》の方法は、このように、中国

漢文の仏書を下敷きにしつつも、これに拘泥せずに、プロット
の展開においても、一々の表現についても、当該法会の目的に
適い、そこに参列する聴衆に訴える力をもつ、彼らになじみの
ある表現へと自在に改変することを志向するものであるように
判ぜられるのである。

なお、このことは、次項で明らかにされるように、当該法会
の目的と説話引用の関連性を把握する作業を通して、さらに確
かなものとなるように思うものである。

(4) 第二篇の法会における当該説話引用の意図

ここで取り上げた岸禪師説話は、『諸事表白』第二篇に収録
されている。

この第二篇は、「施主分大般若 正治二年三月廿五日去年
逝去貴女也」と題されるもので、生前より仏像も経巻も準備万
端整えて、法要供養の日に備えていたある貴女が、突然逝去し
たことで、その貴女の菩提を弔うために営まれた、大般若経書
写供養の法会の際のものである。

本説話の前には、

○開題、供佛施僧道具、悉ク備ナハムナウニハ、御願ハ已ニ成
弁シヌ。行業時至リ機感相應シテウニハ、般若ノ開題マタシ
ケレハトテ、逗留シ御スヘキ事テハ候ハス。往生ノ事ハ只打
思コリ大事ニハ候ハ。時純金熟シヌレハ程ヤハ候。
の文言が置かれ、本説話が以下に展開される。

本篇の冒頭部において、せつかく仏像・経巻整えていた貴女がその素懐を遂げず他界してしまつたことは「此事ハ一端（一）ハ有リ疑キ、可シ成シツ不信ヲモ」と、聴衆の抱くであろう疑念を先取りして提示している。説話直前の文言はこの疑念提示を承けて展開しているであつて、ここに仏の教えとこの度の貴女の逝去とは矛盾しないことを主張する意図を汲み取るべきである。すなわち、往生の事は、時が来れば直ちに実行に移さるべきものであるとの主張が、ここに読み取れる。

この主張は、本説話引用の後に、

○サレハ功德ノ成就シ善根ノ純熟シナリニハ本願禪定女大施主

聖靈ノ御往生モ何ノ滞ト、延リ有ラムヤ。

と語ることと強調され、功德が成就すれば、開題の期日を待たずともすぐに往生するものであるとの見解を示す。

本説話に登場する岸禪師及び小児は、機熟して往生を遂げるのであり、当該法会の追善の対象たる貴女の立場に準えていることは明白である。

以上の点を念頭において、先に見た『宋高僧傳』・『唐岸禪師傳』と『諸事表白』の岸禪師説話の、両者の相違する箇所を検討を行なうこととする。

まず、『宋高僧傳』・『唐岸禪師傳』にしか存在しない箇所についてであるが、この中で叙述の粗密というレベルに止まらずエピソードごと欠けているのは、〈空中に現われた観音・勢

至菩薩を二人の画人が描き消えてゆく〉というものであつた。

これは、『諸事表白』説話において、削除されたものであろうとの見方を先に示しておいたが、何故かと考えてみると、やはり法会の主張との関係において削除理由が明らかとなるように思われる。すなわち、今見たように、本説話は、機熟して往生を遂げることを、例話として示す装置として配されているのであつて、さすれば、画人のトピックは不要との判断がなされたのではなからうか。

一方、『諸事表白』の方にしか見えない箇所については、どうであらうか。

二(2)・(b)の⑩・⑪・⑫は、語り手の評語である。この評語の主張はどのような性質のものであるか見てみる。

まず、⑩は、岸禪師が往生するに当つて弟子に随伴を募る下りで、評語は、「往生の道は、他人に連れていってもらふものではなく自力でなすべきことであるが、ここでは師匠に命ぜられて往生するのである。それにしても、弟子に往生の供を募つても誰一人として名乗り出る者の無かつたことは哀れで悲しいことである」と説く。

⑪は、岸の往生に際し供に申し出た小児が、早速親の了承を取付け念仏し直ちに往生しようとするのを岸が自分より先ではあまりに慌ただしいとがめる下りにおいて、評語は、「縁縁が熟したならば、老少の順に拘らず往生すべきであるのに、俗世の慣習に拘束されるのはそもそもその志が浅いのである」と批

判する。

⑬は、無事西方往生を果した本説話の主人公岸について、話末に「のどかに往生した人である」とコメントする。

当該法会の貴女の境遇に即してそれぞれの評語を解釈するならば、⑩は、貴女の《独力で》逝去したことに準えられ、⑪も機縁が熟した時点で《直ちに》往生した貴女の立場を語っていると解される。⑬は、この説話の締括りとして、ともあれこのように往生することは「のどか」との感想を綴ることで貴女の往生について聴衆が肯定的な印象に傾くよう導く表現となっていると思われるのである。

但し、大まかにそのように解し得たとして、なおこれで十全とは思われない。語り手が意識的であったか否かはともかくとして、⑩・⑫の評語に、岸禪師に対する否定的評価が含まれていることは見逃せない。⑬の評語で「のどかに往生した人」との肯定的評価で締括ることで、その違和感が話末で多少減ずるように思われるが、称賛すべき貴女に準える例話の主人公がこのように否定的に語られることは些か注意を払っておく必要がある。語りの過程で脱線して別の主張（たとえば、語り手の、仏門における師弟関係の現状に対する批判といったようなことが想定されよう）が現われたと見るべきか、その意味するところはなお判断とはしないので後考に俟ちたい。

〔次号（下）に続く〕

注

- (1) 山本真吾「日光輪王寺藏諸事表白の成立について」（『国文学攷』149、平成8・3）
- (2) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特輯号3、昭和46・3）
- (3) 山本真吾「日光輪王寺藏『諸事表白』所収の説話について」（『鎌倉時代語研究』20、平成9・5）
- (4) 以下の引用文は、かつて小林芳規博士より借覧した紙焼写真を元に筆者が翻刻したものに基づく。本文の声点、仮名の大小などはこれに拠っている。
- (5) 山本真吾「鎌倉時代に於ける表白付説教書の文章構成と文体」（『国文学攷』132・133、平成4・3）
- (6) 注(1)文献。
- (7) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（昭和38、東京大学出版会）
- (8) 遠藤好英「今昔物語集の文章の性格と史的位位置―会話の引用のく様形式の考察を中心に―」（『訓点語と訓点資料』40、昭和44・6）
- (9) 注(2)文献にも指摘されるように、本書における推量「ウ」、格助詞「デ」の使用などもこれに関係しよう。
- (10) 小峯和明『今昔物語集の形成と構造』（昭和60・笠間書院）Ⅱ第一章翻訳の諸相の定義に拠る。

〔本学教員〕